

第4回北陸圏広域地方計画懇談会 議事概要

1. 開催日時

平成21年6月10日(水) 10:00~12:00

2. 開催会場

ボルファートとやま 4階 琥珀の間

3. 出席者(敬称略)

西頭座長、犬島委員、猪爪委員、酒井委員、祖田委員、高山委員、長尾委員、安島委員、柳井委員、吉田委員 (計10名)

4. 議事

(1) 開会

(2) 挨拶

北陸地方整備局副局長

(3) 議事

1)北陸圏広域地方計画の検討状況について

2)北陸圏広域地方計画 計画原案について

3)今後のスケジュールについて

・1)~3)について事務局より資料説明(資料1, 資料2-1~6)

5. 発言概要

- ・表紙に記載の副題の中で、「・・・自然と資源・・・」とあるが、自然も資源の一つであり、資源には、「〇〇資源」のように具体的な資源を指すものが入るのではないか。
- ・「暮らしやすさ日本一」は、大都市圏に比べて暮らしやすいということは分かるし、異論はないが、どの地方圏でも当てはまるため、「暮らしやすさ日本一」を使うには、マーケットリサーチをするなどして、他圏域に比して競争力があるのかについて調べる必要がある。
- ・報告書の表題について、不況をどのように克服するかということが大きな課題となっており、また、東アジアに打って出ようとするシビアな状況の中で、「暮らしやすさ日本一」が冒頭に出てくるのは違和感がある。
- ・副題の「環日本海交流」に関してもまた、本文中では、オーストラリアまでを視野に入れた「東アジア」を見据えて、丁寧に「環日本海諸国を始めとした東アジア」という言葉の使い方をしており、そのようなことから、違和感がある。
- ・地域づくりにおいては、経済、生活、環境が重要なポイントと感じており、これらの観点からキーワードが織り込まれるべきではないかと考えている。表題からは、経済(産業)の色あいが濃く感じられるが、それらが「暮らしやすさ」の中に込められているとも取れないことはない。
- ・また、本文中、随所に都市と農村のことが記載されている。北陸圏の特徴には、中小都市の周辺に農村が張り付き、結合することで、醸し出されている「暮らしやすさ」がある。そういったことが大都市と違うということを中小都市と農村の結合という文言を入れ、シンボリックに一部で強調してほしい。
- ・北陸圏の農業に関しては、稲作が中心で、全農業生産額の7割を占め、米生産の占める割合が全国平均で25%であることと比較すると、北陸圏の米生産割合は非常に高い。そのような

中で、園芸や畜産の振興を図ることも、地産地消の中で、記載してほしい。

- ・ 災害については、昨今、地球温暖化の影響の中で、予測を超えた高潮・高波災害等が発生し、その被害は、戦争で 1,000 人の死者が出ると撤退していることと比較すると、10 万人規模の死者が出ているなど、その災害規模は巨大化している。予測を越えたという部分をもう少し強調し、これに耐えるような生活環境を作り出していくという記載がほしい。
- ・ この計画が策定された後、子供たちが読めるような「私たちの北陸」というイラスト等も交えたような、分かりやすい小冊子を作成してほしい。
- ・ 副題に記載の自然に対する資源となると、「人文資源」あるいは「産業資源」などの表現になるのではないかと感じる。また、「資源」は、圏域のポテンシャルのことを指しているのではないかと感じる。資源という言葉を使うことで分かりにくくなっている。
- ・ おたずねなのであえて表題について言えば、表題を「産業・生活田園空間の形成」とし、交流を中心とした言葉や、「暮らしやすさ」、あるいは、「アジア、国際交流拠点への道」というような副題の案も考えられる。題目については最終的におまかせしたい。
- ・ 経済、生活、環境を含めて暮らしやすさだと考えている。あまり文言を増やすのは無理ではないのか。
- ・ 環日本海交流の拠点については議論があるところかもしれないが、暮らしやすさ日本一はぜひ入れてほしい。
- ・ 61 頁以降の物流面であるが、物流倉庫や港湾における IT 化が進んでいない状況がある。輸送先の確認や通関手続きといった部分の IT 化による効率化が今後必要である。サプライチェーンマネジメントを記載しているので物流面における IT 化についての記述も追加すべきである。
- ・ 観光客にとって工芸品がキラーアイテムとなっている現状がある。石川県などが強い部分でもあるので、表現する必要がある。
- ・ 65 頁～66 頁に記載されている広域観光ルートの構築の部分で道路整備の記述があるが、それに加えて産業クラスター概念についても記述したほうが良い。
- ・ 観光では、「食」「土産」「風景」が重要な 3 大要素である。このうち「風景」についての記述はされているが、「食」「土産」の記述がない。土産物の開発など、意識的に域内消費を高めしていく必要がある。
- ・ 観光からツーリズムへとつなげ、これが居住へと進むような流れができると良いのではないかと感じる。こういうところこそ NPO の力を導入すべきという記述がほしい。観光、ツーリズム、居住へとサイクルが回る仕掛け作りが大切である。
- ・ 宮城県では知産地消としてハイテク製品を売り出しているように、P69 の地産地消では、食だけでなく林産加工品や機械等も地場産品として、取り扱うべきである。
- ・ 国内外からの企業の誘致という記述が見られるが、北陸の基幹産業・補完産業を見て、各県の産業ビジョンとの整合を図った上で、これにあわせて記述する必要がある。
- ・ 北陸圏は昔から建設・製造業が強い地域であったが、これからの日本の産業・社会を考えると、サービス業の育成が重要である。これには、IT 技術を駆使して、物流・港湾の効率化が進まないと実現できない。
- ・ 卸売業を育成していくという方向性も必要である。

- ・ 木材の安定供給という部分をなぜ強調しないといけないのか、その理由が分かるように記載する必要がある。
- ・ 将来像の順番を入れ替えたことは前向きで良いと考えるが、そのために副題との違和感がある。
- ・ ブランド形成の記載が充実されているが、これは非常に大切である。
- ・ 港湾物流でIT化が進められているが、北陸圏側だけの取組では、その取組効果は小さいため、IT化について、対岸諸国の港湾とも連携して取り組むことが必要である。
- ・ 85 頁に観光の記載があるが、インバウンドを呼び込んでいくためには、国内の観光関連整備のみならず、そのことを国際的に訴えていくことが必要である。そのためには、昨年度設立された観光庁とのつながりを活かしていくことや、国際会議の場等で情報を発信していくことが重要である。今年ハバロフスクで開催され6回目となる、ロシア、中国、韓国等の国々で構成される「北東アジア国際観光フォーラム」等もそのような場となる。
- ・ 92 頁には、貿易や観光ルートの構築のことが記載されているが、インバウンドにおいても、国内輸送の充実が重要である。例えば、中国からの新幹線に乗るツアーでは、費用が高いため、新幹線は東京から新横浜までの利用で、あとはすべてバス移動といったことも見られる。
- ・ ハバロフスクから日本への航空費用がロシア企業による独占的な運行のため、1,000 ドル（約10 万円）と高く、インバウンド拡大において、このような費用をどのように低減させるかも重要な課題である。
- ・ 65 頁に「旅行者が何度も訪れたいくなる新たな観光形態の創出」という項があるが、その観光形態にレベルの異なるものが並んでいるように見える。また、戦略目標では、グリーンツーリズムに、エコツーリズム、さらには、ヘルスツーリズムも記載されていたかと思う。商店街での観光交流とこれらとはレベルが大きく異なるのではないか。レベルを合わせていくためには、「生活文化を楽しむ観光」や「移動を楽しむ観光」等の表現の工夫も必要である。
- ・ インバウンドの推進に当っては、例えば南の国の人に対しては雪も観光資源である。中国の人には食文化の人気がある。具体的なターゲット別に具体的に何を売って行くのか、鮮明に記載すべきではないか。
- ・ 最近、伝統工芸や伝統文化等を守り育てていくことにおいても、新たな動きや取組があり、創造都市という、芸術によって都市を再生していく概念が1980年頃にイギリスで生まれている。国内では、金沢市が最初であり、横浜市等が先駆的に取り組んでいる。
- ・ 伝統を活かしたクリエイティブな部分を新しいまちの魅力として作り出していくことを記述すべきである。
- ・ 「金沢等の歴史・文化」と「金沢城等の歴史・文化」の表現では、重複感があるため、表現上の工夫が必要である。
- ・ 17 頁～18 頁にかけて災害の記述がされており、これに加え、能登地震等では風評被害がたくさんあったと聞いているので、災害による風評被害の対策について記述すべきではないか。
- ・ IT 技術の強化・運用については全体を通して記述した方が良いかもしれない。交通分野ならばITSが実用段階に入っている。
- ・ 71 頁～72 頁の医療については、ITによる遠隔地医療等の事例もある。
- ・ 観光分野では、ハード整備については十分記述されているが、もてなし力や情報発信は遅れ

ている。また多言語化も英語程度で遅れている。

- ・ 2 頁では、地方生活圏との連携について記載されるべきではないか。
- ・ 本文中、23 頁のように随所に北陸新幹線や東海北陸自動車道等の記載が見られるが、北陸圏の内なる連携を支えるベースとして「北陸自動車道」があり、そのことをしっかり記載してほしい。
- ・ 28 頁では、地域でがんばるという意味も含めて、人材誘致と人材育成を入れ替えて記載してほしい。
- ・ 45 頁では、高齢者や障害者を始め誰もが・・・と記載されているが、この「誰もが・・・」については、介護する人と介護される人の両者にとって、安心・安心で暮らしやすいことが重要であり、そのことが本文中の記載で分かるようにしてほしい。
- ・ 63 頁では、エネルギーのことが記載されているが、雪を自然エネルギーとして活用すること、農業や食にも大きな影響をもたらす水資源としての雪のことを記載してほしい。
- ・ その他圏域との連携では、三大都市圏と隣接する北陸圏にあつて、幅広く三大都市圏と連携していくことに取り組むことが必要であり、そのことを記載した上で、特に中部圏との連携について記載するといった、記載の工夫も必要である。
- ・ 広域生活圏の構築とともに、その圏域を単位として連携していくということを記述すべきである。
- ・ 資料 2-6 の 3 頁に生活の豊かさのことが記載されているが、そのことを示すのが、共働き世帯の高さでは、説明になっていないのではないかと。また、ゲートウェイ構想の図面も、日本を下に置いた図面とすべきではないのか。
- ・ 中央集権と地方分権について、改めて考えさせられた。
- ・ これまでの全総に比して、全国計画と広域地方計画との 2 層で計画されることになったが、その広域地方計画でも、網羅的に記載されている感が強い。
- ・ 北陸圏は他圏域と比べ、コンパクトで一体感が強く、これまでも 3 県で一体にやっっていこうという掛け声があったが、それが実現に向けて進んでいかない。そろそろ掛け声ではなく、実行していく段階にあると考えている。
- ・ 今のプロジェクトでは、3 県の取組の寄せ集めの感があり、北陸の姿が見えにくくなっている。
- ・ プロジェクトの順番について、産業関連の順番が上位になっているが、このことは昨今の産業・経済情勢や北陸圏の状況からも理解できる。
- ・ 農業に関する地産地消はあるが、商業や工業でもあるのではないかと。
- ・ 副題について意見が出されているが、副題については、アピールできるものとなっていればよいと思う。そういった意味では、具体的な提案がないのであれば、現案でよい。
- ・ 副題については、「暮らしやすさ日本一」だけでよいのではないかと。その前後に「・」付きで、「北陸」が入る案もあるのではないかと。その方が、様々な場面で使いやすいものとなる。
- ・ 「暮らしやすさ」については、かつて福井県の総合計画策定において、近代化の中で、都会にない良さを「暮らしやすさ」で表現しようということを経験したことがあるが、本計画において、時代背景をどう読み込み副題をつけたのか、豊かな暮らしを獲得してきている中で、どこが新しいのかを明確にすべきである。
- ・ 広域地方計画は、行政の横断的な計画であることについて、説明を受けたことがあるが、「第 6 章 計画の実現に向けて」の中で、行政横断的な取組に関する体制を明記すべきである。

- ・ 中央集権と地方分権に関するご意見があったが、一極集中の傾向が一層強まっている中で、一極集中の是正に向けて、地方が力強く前進していくような計画としていくことが必要である。
- ・ 北陸圏の特徴は、北陸本線や北陸自動車道に沿って、中小都市が適正距離に配置され、接続することが住み易さの原点になっている。
- ・ 北陸人は、これまで、東京、近畿、中部を見てきており、日本海に背を向けてきていた。今後において、北陸圏は、より一層日本海側に顔を向けていくことが必要であり、計画においても、強調すべきである。
- ・ 接続都市の特徴を活かして、日本海へ顔を向けた計画とし、前進していくことが必要である。
- ・ 副題は、各圏域の特徴を出し、アピールするものとなることは理解できる。これまで、日本海軸について構想されても、それを実施する段になると、関係機関の連携が課題となっていたことから、(プロジェクト遂行にあっては) 関係機関の連携が重要になってくる。
- ・ 都市の適正配置が北陸圏の特徴であることを考えると、副題において、「地方都市の連携による環日本海交流の中核拠点」とすることも一つの案として考えられる。
- ・ 「田園都市の連携による・・・」というような表現を副題に加える案も考えられる。
- ・ 中小都市が適正に配置されていることが、北陸圏の暮らしやすさにつながるものである。
- ・ 北陸圏においては、都市が接続しながら、連携は十分に進んできていなかった。前回も指摘したが、3 県の垣根を外し、垣根を越えて、連携していくことが重要である。
- ・ プロジェクトの遂行においては、NPO等の民間活力の導入も重要である。
- ・ 総合計画的な上位の計画では、総花的になることは、仕方ないところであるが、そのような中で、計画において、どのように重点化して見せるかが重要である。
- ・ 副題では、マーケティングを専門とする者からすると、地域の優位性を分かるように如何に表現するか、北陸として何を目指すのかというという表現が必要である。
- ・ 計画ができた後、どのようにしてアクションに落とししていくのか、そのためのストーリーの説明があればよいのではないか。
- ・ 富山国際大学の観光の先生が、東海北陸自動車道の開通による五箇山合掌造り集落への中部圏からの入込みの増加について説明されていたが、五箇山での滞在は 30 分程度しかなく、その後は金沢等に向かってしまっているようだ。
- ・ 五箇山の周辺には、砺波平野の眺望が楽しめる場や立山等があるにも係らず、(滞在時間の延長に向けた) 地域間の連携もあまりなされていないようだ。
- ・ 各圏域の副題をお聞きすると、長さ、字数を合わせて、検討されていることや、北陸圏の副題検討の中で、将来像に基づいて、北陸圏の目指すべき方向を「暮らしやすさ日本一」と「環日本海交流の中核拠点」とし、キーワードとして決定されていることから、両キーワードは良いと思う。
- ・ むしろ、両キーワードをつなぎ、説明するような言葉を検討すべきである。
- ・ 例えば、自然と文化的活力といった新しい時代を作り出していくような方向性を込めていくことが望ましい。
- ・ (座長からご指摘のあった) 砺波平野の風景等の観光地連携に関しては、北陸における風景の見方、観光における見方を「北陸の物語」として作り上げていくことが必要であると考えており、「北陸の物語」について、観光のプロジェクトで記載がなされていると理解している。

- ・ 具体的には、北前船については、東北から近畿までつながる背景等も含め、物語に仕立てていくこと等である。
- ・ 北陸の中小都市は、接続はしているものの、連携はしていない状況である。
- ・ そのような中、観光や消防、医療、大学間でも教育連携に取り組んでいるところである。
- ・ 一方で、商業の連携は都市間で競争になってしまうため、なかなか難しいが、連携によって魅力を高め、三大都市圏から来訪者が増えるようになっていくと良い。
- ・ 姉妹都市提携 25 周年で中国に行ったが、瀋陽と大連では、これまでまったく計画がなかった新幹線建設と地下鉄の建設が急ピッチで進んでいて来年には完成する。一方、北陸新幹線は、構想されてから 40 年経った今でも、まだ完成されていない。
- ・ 伏木富山港では、ガントリークレーンが 2 基できて大喜びしていたが、大連港では、ガントリークレーンが 40 基設置されている。
- ・ 富山と瀋陽は同程度の規模であったはずだが、これだけのギャップが生まれてきている。
- ・ 総花的では勝ち抜くことができない時代であり、何を地方でやり、何を中央に任せるのか、もう少しはっきりとさせていく必要がある。

以 上